中世における教行信証諸本間の訓読の異同

――「唯」「惟」字について――

永松寛明

目次

一、はじめに
二、教行信証における「唯」「惟」字の訓読
三、古辞書、古訓点資料における「唯」「惟」字の訓読
四、「惟」字と訓との結びつきの変化について
五、おわりに

一、はじめに

従来、漢文訓読語史研究において訓読の歴史が取り上げられる場合、中世の仏教社会における訓読の伝承の問題について説かれることは少なかったと思われる。とりわけ、浄土真宗などの鎌倉新仏教における訓読の伝承の実態については未だ明確でない部分が多い。中世の仏典の訓読の伝承に関しては、師資相承性が強かったと言われる。[1] しかしながら、仏典の訓読が細部にわたるまで、忠実に書写移点が行われていたのかどうか検討の余地があると考えられる。

これまで中世仏教社会の訓読が注目されなかったのは、一つには、中世特有の言語事象を指摘し難い点にあったと考えられる。このために、訓読の異同が存していたとしても、個人差や偶然性といった個別的事象を越えて、日本語の歴

史的変化の一つとして解釈される事例の発掘は、従来あまり行われてきていないように認められる。

浄土真宗開祖の親鸞は、その生前に多くの著述を残しており、現在、自筆本と目されるものも残っている。坂東本教行信証もそうした自筆本の一つであるとされる。[2] 教行信証は、浄土三部経をはじめ、その異訳経典やその他の大乗経典、又、印度や中国や日本浄土教の代表者の著作からの抜き書きからなり、その間に親鸞自身作成の漢文を挟んだ資料である。板東本教行信証には、漢文の間に親鸞のものと思われる訓読も施されている。その訓読に関して、親鸞が独自の解釈に基づいて施した例が指摘されている。[3] 独自の解釈に基づいていると思われる訓読には、当時、漢文を訓読する際に、一般的に使用されない訓読語も存している。本論は、そうした例の一つとして「唯」「惟」字の訓読を取り上げ、この、教行信証に特徴的に現れる訓読がどのように伝承されていったか、その伝承の過程で生じた変化は、何を背景とした変化であるかについて論じようとするものである。

中世において教行信証は数多く書写され、うち、幾つかが残されているが、これら諸本間の系統に関しては既に先行論が存する。[4] 本論においても、それら先学の論に負うところが多い。

二、教行信証における「唯」「惟」字の訓読

教行信証の中世における諸本の間には、「唯」「惟」字に関して以下のごとき異同例が見られる。[5]

教行信証諸本間における「唯」字訓読の異同例

坂東本	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	大徳修伽陀	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	（六末三六・七）
高田専修寺本	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	大徳修伽陀	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	（六・一五二・五）
真宗寺本	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	大徳修伽陀	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	（六末二一ウ三）
文明本	唯願（ク）ハ容恕シタマヘ	大徳修伽陀	唯願（ク）ハ容恕（シ）タマヘ	（六末二一ウ三）

寿福院本　唯願（ク）ハ容恕シタマヘ　大徳修伽陀　唯願（ク）ハ容恕シタマヘ　（六末五二ウ三）
高田室町末期本　唯願（ク）ハ容恕シタマヘ・大徳修伽陀・唯願（ク）ハ容恕シタマヘ　（六末二一ウ三）
高田慶長本　唯願（ク）ハ容恕シタマヘ　大徳修伽陀　唯願（ク）ハ容恕シタマヘ　（六末二一ウ三）
西蓮寺本　唯［イ、唯］願クハ容―恕シタマヘ［イ、恕シタマヘハ］　大―徳修―伽陀　唯［イ、唯］願クハ［イ、願（ク）ハ］容―恕シタマヘ　（六末二二ウ五）

右の用例は、大梵天王と僑尸迦帝釈が仏に対して願いを述べる場面である。特に「唯」字の訓に異同が見られる。

次に、教行信証諸本間における「惟」字訓読の異同例を示す。

坂東本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）（スル）コト莫（二）（カ）レ　（三　一一一・二）
高田専修寺本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）（スル）コト莫（二）カレト　（三　一三三・一）
真宗寺本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）スルコト莫（二）（カ）レ　（三末二〇ウ四）
文明本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）スルコト莫（二）カレ　（三末二〇ウ四）
寿福院本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）スルコト莫（二）カレ　（三末二〇ウ四）
高田室町末期本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）（スル）コト莫（二）カレト　（三末二〇ウ四）
高田慶長本　惟願（ク）ハ　大王且愁怖（一）（スル）コト莫（二）（カ）レ　（三末二〇ウ四）
西蓮寺本　惟願（ク）ハ　大王且愁―怖（一）（スル）コト莫（二）（カ）レ［イ、莫（カ）レト］　（三末二〇ウ四）

（用例は訓読文にて示す。用例中の傍線は論者による。（　）は補読、（一）（二）は一二点、［イ］は異読、―は合符を示す。坂東本と高田専修寺本との二資料の所在は、巻・影印本の頁と行数を示す。他の資料では、巻・丁・行数を示す。）

用例は、大臣が王に対して願いを述べる箇所であり、この例も願望を表す表現である。「唯」字と同様に「惟」字の訓に異同が見られる。

右の例より、「唯」「惟」字の訓読に「タダ」付訓の例があることが分かる。坂東本以下諸本では、「唯願」「惟願」の訓読を「ヤヽネガハクハ」としているが、一部の本では「コレネガハクハ」や、「タヽネガハクハ」とする。この異同が、諸本にわたって如何なる箇所に現れるか明らかにするため、教行信証中の「唯」「惟」字の訓読の全用例について調査すると、「唯」字全八十例において、「タダ」の付訓があるものは十六例、「ヤヤ」の付訓があるものは九例である。付訓例のうち、教行信証中では、「唯」字は「タダ」と訓読されることが最も多い。「ヤヤ」付訓のある箇所は、「唯然」「唯観」「唯願」等の漢字の訓読である。「ヤヤ」付訓九例の内二例は、室町末期本、高田慶長本、西蓮寺本に於いて異同が見られ、「タダ」が付訓される。

次に、「惟」字の訓読について述べる。付訓の状況を次頁に表一にて示す。

この表一より、「惟」字は「コレ」訓や、「オモフ」訓が主に用いられることがわかる。

問題点は「唯」「惟」字に共通する訓として「唯願」「惟願」字を訓読する際に「ヤヤ」訓が用いられる例である。両例共に、目上である王や仏に対して臣下が願いを述べる会話の箇所に現れる。

和訓「ヤヤ」は、「唯」字の字義から推定するに、副詞的用法であり、親鸞の教行信証に特徴的な訓読である可能性が高いと考えられる。[6] 又、教行信証中に見られる「唯願」や「惟願」を「ヤヤ」と訓読することは、現在の調査結果（後掲する古訓点資料における「唯」「惟」字の訓読を調べた結果等）からは、一般的に広く用いられた訓読ではなかったと思われる。その和訓「ヤヤ」の箇所に、書写年が下る資料の中には「タダ」訓を付すものが現れる。

その他、「惟」字の訓読の一覧において、教行信証諸本間で、「惟」字を「唯」字としている資料があるのは、この「惟願」の表現に集中している。何故、「惟願」の表現に異同が集中しているかという問題は、異同の現れる箇所と表現の関

表一　教行信証諸本間の「惟」字訓読一覧

漢字列	諸資料名								所在
	板東本	高田専修本寺	真宗寺本	文明本	寿福院本	高田室町末期本	高田慶長本	西蓮寺本	
阿惟越到	ユイ「ヱタイノ」		ユヰ「フタイノ」	ユヰ		×		ユヰ	二411
阿惟越到									二414
阿惟越到									二416
阿惟越到									二425
惟一也	コレ(朱)レ(墨)	コレ	コレ	コレ		コレ	レ	コレ	二107
思惟	シテ	シテ	シテ	シテ		シテ	シテ	シテ〔シ〕	二135
惟一	コレ	コレ	コレ			コレ	コレ	コレ	三692
阿惟越到			ユヰ	ユヰ					三100
惟願〜	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	タヽ	ヤヽ	三109
惟願〜	ヤヽ	コレ「ヤヽ」	ヤヽ	ヤヽ	ヤヽ「コレ」	コレ「ヤヽ」	タヽ	コレ〔ヤヽ〕	三111
惟願〜	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ※	ヤヽ		ヤヽ※1	三112
惟願〜	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ※	ヤヽ		ヤヽ1	三114
惟願〜	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ		ヤヽ※1	三114
惟願〜	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ※	ヤヽ		ヤヽ※1	三115
惟願〜	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ		ヤヽ※1	三116
惟願〜	ヤヽ	※	ヤヽ	ヤヽ	※		タヽ	※2	三119
惟願〜		ヤヽ※	ヤヽ	ヤヽ	ヤヽ※	ヤヽ		※2	三123
思惟	ヲ	ヲ	ヲ	ヲ		ヲ	ヲ	ヲ	三151
仰惟〜	モミレハ	モンミレハ	ヲモンミレハ	モンミレハ		モンミレハ	ミレハ	ミレ	四138
思惟	ト「オモフ」	ト	ト	ト		ト	ト	ト	六本191
惟異	コレ	コレ	コレ	コレ		コレ	コレ	コレ〔レ〕	六本451
惟異	コレ	コレ	レ	レ		コレ	コレ	コレ〔レ〕	六本465
思惟	セム「オモフ」	セム「オモフ」	セム	セム		セム「オモフ」	セム	セム〔ス〕	六本708

（表は上から当該箇所の漢字、教行信証八資料の「唯」「惟」字の付訓例、坂東本の用例所在位置と続く。表中の符号について空欄は付訓が無い例、×は当該字が無い例、〜は漢字列の欄で用例の以下省略を示す。（朱）は朱書、（墨）は墨書、「　」は左傍訓　合符は省略した。※は「惟」字箇所が「唯」字とされている例　1は異本注記に「惟」字のある例、2は異本注記に「惟」（ヤヽ）のある例、〔　〕は別筆を示す。）

係について未だ明らかにしておらず、事象を指摘するに留める。

以上の結果より中世以降における教行信証諸本中の「唯」「惟」字と和訓との結びつきを整理したものが上の表である。

表二

	鎌倉	室町
唯	タダ	タダ
	ヤヤ	ヤヤ
惟	ヤヤ	タダ
	コレ	ヤヤ
	オモフ	コレ
		オモフ

表二は、上欄に鎌倉時代における「唯」「惟」字と結びつく訓、下欄に室町時代以降における「唯」「惟」字と結びつく訓を示した。

表二より、室町時代書写の資料中に「惟」字に「タダ」を付訓する例が現れることが確認できる。現在までの調査では、高田慶長本にのみ見られる用例である。以下、「惟」字に「タダ」訓が現れる要因について明らかにするため、同時代における漢字と和訓との結びつきを探ることとする。

三、古辞書、古訓点資料における「唯」「惟」字の訓読

「唯」「惟」両字と和訓の対応関係を知るため、古辞書や訓点資料を資料群ごとに、平安鎌倉時代を中心として室町江戸時代にかけて配列し、比較する。先ず、「唯」「惟」字の古辞書での記述を確認し、それぞれの漢字と和訓の結びつきを検討する。

例えば、観智院本類聚名義抄における「唯」「惟」字の記述を見ると、「タダ」訓を記載するか否かという違いが存している。

○唯　音惟（キ）タ、ヒトリ※　タカシ　又以水反　—然之處　（観智院本類聚名義抄　佛中三十一オ五行目）

○惟　役蔡反　オモムミレハ※　オモハカル※　ハカリミレハ　ハカリコト　オモフ※　ネカハクハ　コレ※　コヽニ　ヒラク　コトハリ　カタラヒ　ウツ　アリ　ムラカル　ノフ　辞也　憂也　和ユイ※　（同右　法中四十五ウ七行目）

（※は声点の有ることを示す。改行を示す符号は省略した。）

「唯」字には「タダ」訓の記載が存するが、「惟」字には「タダ」訓の記載は存しない。同様なことは三巻本色葉字類抄においても見られる。

○只タ、但忠啻唯獨也恒督直祇且適往止徒地―忍　已上同　（黒川本色葉字類抄　巻中六ウ七）

又、鎌倉時代成立の古辞書の中で、和訓の採録数が、他の古辞書に比して多い字鏡集諸本においても「惟」字に「タダ」訓は存しない。

○唯（ヰ）　タカシ※　タ、※　ヒトリ※　（天文本字鏡鈔　巻四　口部六六一・四）（所在は影印の頁数と行数を示す。）

○惟（ヰヨク）　ムラカル　ネカハクハ　ウツ　コレ　ヲモハカル　ハカリミレハ　ヒラク　ヲモンミレハ　ハカリコト　コトハ　ウ　コトハリ　ノフ　ヲモムハカリ　ヲス　アリ　ヲモフ　ヒラク　オモミル　ネカフ　（同右　巻四　心部八〇八・二）

以上の例には、「惟」字と「タダ」訓の結びつきを明示した例はない。

平安時代から江戸時代初期にかけての古辞書において、「唯」「惟」字の記述中に「タダ」の付訓が存しているかどうかについて、調査したものが次頁の表である。

この表より、平安鎌倉時代における古辞書では、「惟」字に「タダ」と記載した例はなく、室町時代に入ってから辞書に現れていることが分かる。明確に書写年代が分かるもので、「惟」字に「タダ」訓のある最も古い辞書は、文明本節用集（一四六九年書写）である。つまり、現在調査した範囲での古辞書の記載からは、「惟」字に「タダ」訓が結びつく例が見えるのは、室町時代以降である。例えば、応永本字鏡集の「惟」字に登載された和訓は二十一条あり、その中に、「タダ」訓の登載はない。一方、室町時代に入り、夢梅本倭玉篇において、「惟」字に登載された和訓は「オモンミル」以下、五条であるが、この中に「タダ」訓が存している。このことは、平安鎌倉時代の「惟」字と「タダ」訓との結びつき方が、室町時代以降のそれと比べて、弱いことを推定させる。

表三　平安時代より江戸時代初期にかけての古辞書中における「唯」「惟」字の「タダ」訓

啻（タダ）	但（タダ）	只（タダ）	唯（タダ）	惟（タダ）	資料名	書写年
				×	類聚名義抄　図書寮本	平安時代
○	○	○	○	×	類聚名義抄　観智院本	鎌倉時代
		○	○		類聚名義抄　鎮国守国神社蔵本	鎌倉時代末期
○	○	○	○	×	色葉字類抄　三巻本	鎌倉時代
				×	字鏡　世尊寺本	鎌倉時代初中期
○		○	○	×	字鏡集　龍谷大学本	鎌倉時代
○	○	○	○	×	字鏡鈔　天文本	1532 年頃
○	○	○	○		字鏡集　白河本	室町時代
○	○	○	○	×	字鏡集　寛元本	江戸時代
○	○	○	○	×	世俗字類抄　天理図書館蔵	鎌倉時代
			○	×	法華経単字	1136 年
○		○	○		篇目次第	室町時代中期
○		○	○		和漢通用集	1556 年
○	○	○	○	○	倭玉篇　夢梅本	1605 年
		○	○		温故知新書　尊経閣文庫本	室町時代
		○	○		運歩色葉集　静嘉堂文庫蔵	1548 年
		○	○		下学集　亀田本	室町時代
		○	○	○	下学集　春林本	室町時代
			○	○	下学集　文明十七年本	1485 年
○		○			色葉集	室町時代
○	○	○	○	○	節用集　文明本	1469 年
	○	○		○	節用集　明応五年版	1496 年
○		○	○	○	節用集　弘治二年本	1556 年
	○	○	○	○	節用集　永禄二年本	1559 年
○		○	○		節用集　饅頭屋本	室町時代
○		○	○	○	節用集　乾本	室町時代
○		○		○	節用集　黒本本	室町時代
○		○	○	○	節用集　早大本	室町時代
		○	○		節用集　岡田氏旧蔵本	室町時代末期
	○	○	○	○	節用集　村井本	室町時代末期
○		○	○	○	節用集　易林本・小山版	1610 年
○	○	○	○		合類節用集	1680 年
○	○	○	○	○	書言字考節用集	江戸時代初期

○は当該漢字の記述があり，「タダ」の和訓の存するもの。
×は当該漢字の記述はあるが，「タダ」の和訓の存しないものを示す。
参考までに「只」「但」「啻」字についての調査結果も掲げた。

表四　平安鎌倉時代の仏書訓点資料中における「唯」「惟」字の訓読一覧

惟	惟	所蔵場所並びに資料名	加点時期
コレ系	オモフ系		
		東大寺図書館蔵金光明最勝王経註釈	平安時代初期
		故山田嘉造氏蔵妙法蓮華経方便品古点	平安時代初期
		小川本願経四分律古点	810～825年
		東大寺図書館蔵成実論巻二十一	829年
		東大寺図書館蔵無上依経古点	平安時代中期
		石山寺蔵仏説太子須陀拏経	平安時代中期
		興聖寺本大唐西域記巻十二	平安時代中期・天暦頃
		随心院蔵無畏三蔵禅要	平安時代中期
		高山寺蔵十二天法	平安時代後期
		月瀬文庫蔵法華経法師品第十古点	平安時代後期
		東大寺図書館蔵法華文句巻二	平安時代後期
1		東大国語研究室蔵恵果和上之碑文	1037～1053年
		高野山西南院蔵蘇悉地羯羅経巻上	1071年以前
2		高山寺蔵恵果和上之碑文	1070～1080年
		東大史料編纂所大乗理趣六波羅蜜経古点(序)	1083年
1		高山寺蔵三教指帰巻中	院政初期
	1	立本寺蔵妙法蓮華経古点	1097年
		随心院蔵普賢講作法	院政期
		立本寺蔵仏説観普賢菩薩行法経	1099年
		高野山西南院蔵甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌	1100年
1		東大国語研究室蔵不空羂索神呪心経	1151年
1		高山寺蔵文鏡秘府論	1165年
		随心院蔵大毘盧遮那成仏経疏巻第三	1181年
1		最明寺蔵往生要集	院政中後半期
9	38	興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝	院政後期
		真福寺蔵八名音蜜陀羅尼経	鎌倉時代中期
		仁和寺蔵後鳥羽天皇御作無常講式　※	1249年
16	39	合計	

右より仏書訓点資料の書写年、所蔵場所並びに資料名、「惟」「唯」字の各資料ごとの付訓という順に並ぶ。
各桝の数字は用例数である。下欄にはそれぞれの項目の合計数を示す。左端は「唯」「惟」字の用例数合計を示す。
※印では、補読は採っていない。

次に、古訓点資料における状況を示し、別の視点から観察したい。

表四は、平安鎌倉時代の仏書訓点資料中において「惟」字に「タダ」訓が結びつく例を見出せるか否かについて調査したものである。表より「惟」字には、「オモフ」や「コレ」の付訓、「唯」字には、「タダ」や「タダシ」の付訓が多く付されていることが分かる。しかし、「惟」字に「タダ」訓の結びついた確例は、調査範囲にはない。

	唯												惟							
		思唯	唯然	唯然	唯然	唯願	唯願	唯	唯	唯	唯	唯	思惟	思惟	惟忖	惟忖	惟願	惟願	惟	惟
	熟語	無付訓	無付訓	熟語	タダシ系	無付訓	タダシ系	無付訓	不明	音読	タダ系	タダシ系	無付訓	熟語	熟語	オモフ系	コレ系	無付訓	熟語	無付訓
18						6		3					3	6						
23					1	5		7				6	1	3						
5						4		1												
5													2	3						
3									1				2							
4								2			1	1								
9								6				3								
11						2		4										5		
1						1														
2														2						
3														3						
4																			2	1
18							2	1	1		6	8								
4																			1	1
2								1				1								
5								3		1										
74		1	2	1	2	8	19	6			1	23	1	7	1	1				
7						1		1				5								
6						3		1					2							
6													1	5						
2						1														
10								6			3									
14								9			1		2	2						
102	3				1	1	3		3		9	65	6	5					5	
125	1					1	1	50		1	6	7					1		1	9
2							1							1						
1											1									
466	4	1	2	1	4	33	26	101	5	2	28	119	20	37	1	1	1	5	9	11

表中、「唯」字に「思唯」という熟語が一例見られる。この用例は、「思惟」字との混同であると考える。以下の用例である。

或いは菩薩の　而も比丘と作（り）て　獨（ひと）り閑―静に處して　樂（ネカ）つて經典を誦するを見る。又菩薩の　勇―猛に精進して　［於］深山に入（り）て　佛道を思―唯するを見る。

（立本寺蔵妙法蓮華経古点　訓点語と訓点資料別刊第四　四頁下十三行目）（用例中、「する」などの一つのヲコト点を示す符号は省略した。）

以上の用例の他は、「唯」「惟」字で同じ訓が付された例や、混同されたと思しき例は、見出すことが出来なかった。又、「惟」字に「タダ」訓が結びつく例で院政期以前における確例については、先行研究においても指摘されていない。(7) 以上の結果からは、平安鎌倉時代においては、「惟」字に「タダ」訓を付すことは、「唯」字に「タダ」訓を付すことに比して、一般的であったとは考えにくいのではないかと思われる。

「唯願」は仏典に頻出する用例であるため、漢籍にはその用例は見出しにくいが、「惟」字と「タダ」訓との関係を探るため、表五において平安鎌倉南北朝時代を中心とする漢籍訓点資料における調査結果を示す。

漢籍の訓点資料においては、「惟」字に「タダ」の付訓例は、鎌倉時代加点の群書治要（史部）と、南北朝時代加点の大学章句、白氏文集に見出せる。この結果からは、

表五　平安鎌倉南北朝時代を中心とする漢籍における「唯」「惟」字の訓読

唯	惟	古訓点資料	加点時期
○		観智院蔵世俗諺文	平安時代末期
		神田本白氏文集	1113 年他
○		猿投神社蔵古文孝経	1195 年
○		三千院蔵古文孝経	1217 年
	○	書陵部蔵群書治要	1255 年他
○		猿投神社蔵文選	1282 年
○		猿投神社蔵文選	1302 年
○		高山寺蔵論語	1303 年
○		穂久迩文庫蔵五行大義	1333 年
○		高山寺蔵荘子	鎌倉時代後期
○		醍醐寺蔵遊仙窟	1344 年
	○	猿投神社蔵白氏文集	1353 年
○		猿投神社蔵論語	1362 年
○		猿投神社蔵白氏文集	1363 年
	○	随心院蔵大学章句	南北朝時代
○		猿投神社蔵白氏文集	1405 年
		文和二年（1353）本と一続き	

当該資料の「唯」「惟」字に「タダ」訓のある場合、左欄に○を付す。

表六　群書治要（経部）における付訓の分布状況

合計	孔子家語	論語	孝經	韓詩外傳	春秋外國	周書	禮記	春秋左氏	毛詩	尚書	周易	序	資料名		
	10	9	9	8	8	8	7	5—6	3	2	1	1	巻		
	経														
4										3		1	オモフ系	付訓有り	惟
1	1												熟語		
67						12	1	2		52			コレ系		
1										1			コノ		
0													タ丶系		
6										5	1		助詞類		
157	1		1			1		1	2	151				付訓無し	
0													見消	特殊	
0													本文異同		
236	2	0	1	0	0	13	1	3	2	212	1	1	合計		
0													ヒト	付訓有り	唯
2	1			1									熟語		
0													タ丶		
1					1								助詞類		
55	5	4			1		6	16	2	8	13			付訓無し	
0													本文異同	特殊	
58	6	4	0	1	2	0	6	16	2	8	13	0	合計		

春秋左氏とは春秋左氏傳、春秋外國とは春秋外傳國語を示す。

表七　群書治要（史部）における付訓の分布状況

合計	晉書	呉志	蜀志	魏志	後漢書	漢書	史記	資料名		
	29—30	27—28	27	25—26	21—24	14—19	11—12	巻		
	史									
11	4			1	5	1		オモフ系	付訓有り	惟
5	1			2	2			熟語		
1					1			コレ系		
0								コノ		
6					6			タ丶系		
7	1	2			4			助詞類		
19	2	2		3	2	5	5		付訓無し	
0								見消	特殊	
2				2				本文異同		
51	8	4	0	8	20	6	5	合計		
0								ヒト	付訓有り	唯
1					1			熟語		
1		1						タ丶		
2					2			助詞類		
42	7	2	4	6	10	13			付訓無し	
2	2							本文異同	特殊	
48	9	3	4	6	13	13	0	合計		

表は群書治要の各資料を経部、史部、子部の順に並べ、各付訓の数を調べたものである。子部は分割した。
表中、付訓の種類について「～系」とあるものは活用形の違うものや、付属語のついたものも含めた。
「見消」は本文に見消符号の付いたもの、「本文異同」とは「惟」「唯」字に異本注記があるものである。

表八　群書治要(子部)における付訓の分布状況

子																				
40	39	38	37	37	37	36	36	36	35	35	34	34	33	33	32	31	巻			
賈子	呂氏春秋	孫卿子	荘子	慎子	孟子	尸子	商君子	呉子	曾子	文子	墨子	老子	孫子	晏子	管子	六韜	資料名			
																	オモフ系	付訓有り	惟	
																	熟語			
															1		コレ系			
																	コノ			
																	タ、系			
																	助詞類			
																		付訓無し		
																	見消	特殊		
																	本文異同			
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	合計			
												1					ヒト	付訓有り	唯	
2																	熟語			
		1													1		タ、			
																	助詞類			
3	5	6	2	1	3	5	1	1	5	3	1	7	2	1	2	5		付訓無し		
					1												本文異同	特殊		
5	5	7	2	1	4	5	1	1	5	3	1	8	2	1	3	5	合計			

群書治要合計	合計	子部続き																	巻
		50	50	49	48	48	47	47	46	46	45	45	44	44	43	42	42	41	
		抱朴子	袁子正書	傅子	時務論	體論	世要論	劉廙別傳	中論	申鑒	仲長子昌言	崔寔政論	潛夫論	桓子新論	説苑	新序	鹽鐵論	淮南子	資料名
17	2								2										オモフ系
8	2				1		1												熟語
75	7	1		1						4									コレ系
1	0																		コノ
6	0																		タ、系
13	0																		助詞類
190	14			3			2			8								1	付訓無し
1	1															1			見消
2	0																		本文異同
313	26	1	0	4	1	0	3	0	2	12	0	0	0	0	0	1	0	1	合計
1	1																		ヒト
5	2																		熟語
5	4	1													1				タ、
4	1			1															助詞類
200	103	1	11	12		4	2	1	1	5	2	1	1	1	2	2	1	3	付訓無し
3	1																		本文異同
218	112	2	11	13	0	4	2	1	1	5	2	1	1	1	3	2	1	3	合計

「惟」字に「タダ」訓が付される例は、鎌倉時代文永二年（一二六五）に既にあることが確認出来る。[8] その他、猿投神社蔵白氏文集には、「惟」字に「タダ」を付したと思しき例が一例あり、随心院蔵大学章句には、二例存する。

漢籍訓点資料における調査結果は、古辞書や仏書訓点資料における調査結果とは異なり、鎌倉時代に確例が現れる。その鎌倉時代の確例が如何なる箇所に付されているかを示すため、群書治要の付訓状況を一覧する。

前頁表六～八より、経部では、「惟」字には「コレ」訓が頻用され、特に尚書に多いことが分かる。又、経史子を通じて「惟」字に「タダ」の付訓をするのは、後漢書のみである。現段階では、用例の出現に偏りがある点などから、後漢書の「惟」を「タダ」と訓読する例が、当時の一般的な漢字と和訓の結びつき方だったのかという点については問題が残る。

しかし、群書治要内部の尚書やその他漢籍には、無付訓の例が数多く存し、後漢書は、他の資料より付訓のある率が高い。そのため、その他資料において無付訓の例中に、「タダ」と訓読された例の有無について検討が必要である。そこで、漢字文の用法上の検討を行うと、後漢書の「タダ」訓の用例と類似の用法として、以下の如き例が見出せる。

① 力盡（キ）ヌレは［則］叛ク　怨—叛（ノ）［之］民ハ・復（タ）使ハル可（カラ）不（返）。惟（タ）・陛—下・度（ハカ）レ［之］。

（後漢書三　五九行目）（以下、［　］は不読字、・は読点、（返）（一）（二）は返り点や一二点、（入）は入声点を示す。）

② 惟（タ）・陛—下・經—典（ノ）［之］誡（イマシメ）（一）を慎（シ）ミ・變—復（入）（ノ）［之］道（一）を圖（ハカ）リ・佞—巧（ノ）［之］臣（一）を屏（シリゾ）（二）ケ—遠ケ・鶴—鳴（ノ）［之］士（一）を徵（メ）セ。

（後漢書三　一一六行目）

③ 王曰來（タ）レ汝（チ）説・爾惟（ナレ）・［于］朕か志（一）を訓（フシ）（二）ヘヨ

（尚書　二七五行目）

④ 豈（ニ）　惟（ノ）魯而（ミ）—已ナラン哉（ヤ）。

（孔子家語　五五一行目）

⑤ 惟（レツ）慎（ミ）て有—司牧—夫（一）を擇（エラ）（二）フ而（ノ）—已（ミ）ナリ。

（尚書　四二八行目）

①から③までは、会話で、相手に命令や依頼をする際に強調する用法の例であると思われる。後漢書では、「タダ」を付訓しているが、尚書の類例では、「コレ」を付訓している。④⑤の用例は、限定の用法であると思われる。後漢書に限定の用法を示す「惟」の用例は見出せないが、「タダ」訓と限定の用法は関係が深いと見て、経書における限定の用法の「惟」字を調べた。⑤の尚書では限定の用法と思われる「惟」字に「コレ」を付訓している。しかし、用例数が少なく、この例を以て、尚書と後漢書は共通の用法に異なる付訓を与えているとは言えない。その上、群書治要に偏りながらも「惟」の例があったことは、鎌倉時代においても調査範囲を広げれば、まだ用例が現れる可能性がある。しかし、用例の現れる頻度や、古辞書等の検討、類似と思われる用法に他資料での確例が無い点と合わせても、「唯」字に「タダ」訓が結びつく関係ほどの強さを持ったものと思われない。

一方、訓点資料も、室町江戸時代に下ると、資料の内容に関わらず、以下の如き用例を見出すことが出来る。

⑥　天（ノ）［之］人ニ於（返）ケル親疎（一）有（二）ルコト無（返）シ　惟有徳者則　輔ク［之］　民ノ［之］上ニ於（返）ケル常ノ主（一）有（二）ルコト無（返）シ　惟己ヲ愛（返）スル者則　歸ス［之］

（文明本節用集　天部態藝門　七二八頁・六・七行目）（「唯」「惟」字横の傍線は論者によるものである。）

⑦　夫人ー情惟愛スルトキハ則傳ヘ頌スルトキハ則傳フ　少陵カ七律　人固ヨリ愛シテ且頌ス［也］

（杜甫集解　鼇頭増廣本　宇都宮由的頭注　元禄九年版（一六九六）・杜工部七言律詩集解序　四丁ウ四行目）

⑧　惟ノ字タダト讀ムトキ。唯ノ字ト義全ク同シ　字書ニ此ヲ惟ー獨ノ惟ト云フ。

（助辞譯通　岡白駒著　宝暦十一年（一七六一）序　二十二丁ウ六行目）

その他、事物紀原（格致叢書本　鵜飼信之點　明暦二年版（一六五六））の如き類書や、本朝食鑑（丹岳野必大千里父著　元禄十年版（一六九七））や、禅の語録等にも容易に用例が見出せる。後述するが、江戸時代に、新注に依拠して訓読が施された論語の和刻本においても同様の例が見られ、古注依拠の論語には見られない。江戸時代版本において「惟」に「タ

表九

	平安鎌倉	室町江戸
唯	タダ	タダ
惟	(タダ)※	タダ
	コレ	コレ
	オモフ	オモフ

※後漢書の用例

ダ」を付訓する例が散見することは、平安鎌倉時代の「惟」と「タダ」訓の結びつきに比して、室町江戸時代になり、その結びつきが強まったと言えるのではないかと考えられる。

以上の調査結果をまとめるならば、表九の如く「唯」字と和訓の結びつきは、室町時代に入っても変化が見られないが、「惟」字は、室町時代に入り、「タダ」訓と結びつく例の現れることが傾向として見出せる。

四、「惟」字と訓との結びつきの変化について

中世までの本文では「唯」字だった箇所を、近世において「惟」字で記し、付訓も同じく「タダ」とする例が、論語の古点本間において見られる。

異同を示すため、鎌倉室町時代の古点本と、江戸時代の版本との比較を行う。論語の古点本と江戸時代の版本の間に、「唯」字と「惟」字に異同があり、同一箇所に前者では「唯」字、後者には「惟」字とする。

⑨ 始有(返)(リ)卒(ラハリ)有(返)ルコト[者]其唯(タダ)聖—人(カ)乎　弘安國曰(ク)終(シウ)—始(シ)一(ノ)如(ク)ナル唯(タダ)聖—人ナラク耳(ノミ)已　(猿投神社蔵論語　康安二年(一三六二)加点　子張十九)

⑩ 始(メ)有(返)リ卒(ラハリ)有(返)ル者(モノ)ハ、其惟(タダ)聖—人カ[乎]。　(道春点論語　寛文四年版(一六六四)子張十九)

論語中には、他にも類例がある。以上の問題は、古注による資料の場合「唯」字が使用され、新注による資料の場合「惟」字が使用されるという違いである可能性が考えられる。

そこで、古注に依拠して訓読を施した論語と、新注に依拠して訓読を施した論語とで「唯」「惟」字の異同が如何なる様相を示すか調査したものが表十である。

表より、論語には五カ所に古注依拠のものと新注依拠のものの間で異同があることが分かる。異同の箇所では、「唯」

表十　中世から近世にかけての論語中の「唯」「惟」字の異同

資料名	版行・書写年	章	6	21	3	15	14	10	28	33	19	19	1	8	26	26	15	3	25	12
		注＼篇	2	2	※4	4	5	※7	7	7	8	8	10	※10	11	11	13	17	17	※19
資料一　高山寺蔵論語	一三〇三年等写	古	×	×	×	×	×	口	口	口	口	口	×	×	×	×	×	×	×	×
資料二　猿投神社蔵論語	一三六二年写	古	×	×	×	×	口	×	×	×	×	×	×	×	×	×	口	×	×	口
資料三　片仮名傍訓本論語	江戸時代初期版	古	口	心	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口
資料四　論語集解	一七〇二年版	古	口	心	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口
資料五　北野宮寺刊論語	一八四八年版	古	口	心	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口
資料六　東京大学蔵論語	江戸時代写	古	口	心	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口
資料七　石斎点四書大全	一六五一年版	新	口	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	心
資料八　道春点四書集註	一六九四年版	新	口	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	口	口	心
資料九　惕齋点四書集註	一六九八年版	新	口	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	口	口	心
資料十　道春点論語	一七五四年版	新	口	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	口	口	心
資料十一　道春点四書	一七九一年版	新	×	×	×	×	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	口	口	心
資料十二　倭板四書	一七九五年版	新	口	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	口	口	心
資料十三　山崎嘉点四書集註	一八五四年版	新	口	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	×	×	×
資料十四　大魁四書集註	江戸時代版	新	心	心	心	口	口	心	口	口	口	口	口	心	口	口	口	口	口	心

表は中世から近世の論語中に存する「唯」「惟」字の全用例を篇と章ごとに示したものである。表中、「惟」字は「心」で示し、「唯」字は「口」で示し、「タダ」の付訓がある箇所は網掛けを施した。×は欠損等のため当該箇所がないものを示す。篇と章の数字は金谷治編岩波文庫本論語による。注の欄の「古」とは古注に依拠して訓読されたものであることを示し、「新」とは新注に依拠して訓読されたものであることを示す。版本の刊行年は、刊記の記載等を参考にしたが、対象とした資料は初刷のものではなく、実際の刊行年は下ると思われる。表より新注依拠の資料の四篇三章や七篇十章等の箇所に「惟」字に「タダ」付訓のある例が見い出せる。※印箇所参照。

資料1は高山寺古訓点資料第一、資料2は猿投神社影印叢刊、資料3、5は汲古書院刊和刻本経書集成古注之部所収影印による。資料4は国立国会図書館蔵本、資料6は東京大学総合図書館蔵本、資料7は架蔵本、資料8～14は広島大学文学部角筆資料室所蔵本による。

字から「惟」字へと本文の変更がありながら、訓読は古注と新注とで変更がない例が多い。

以上の結果から、新注依拠の論語の本文にて、「惟」の例が見出されるようになることが分かる。この事例も「惟」字と「タダ」訓との結びつきが強くなる要因に何らかの関係性を有するものではと考えられる。

ここで、先の教行信証の高田慶長本に見いだせる異同の要因について述べると、異同の生じた資料では、「唯願」字の訓読にも「タダ」訓が使われている例がある。そこには親鸞が訓読した言語をそのまま写し取るという態度より、ある程度、書写者自身が主体的に施した訓読が現れていると考えられる。同様に「惟」字に「タダ」訓の現れる異同は、室町時代において「惟」字に対する和訓の結びつきが変化したことを背景として生じたものではないかと思われる。(9)

五、おわりに

これまでの検討についてまとめると、

一、室町時代における教行信証写本中、「惟願」の「惟」字に「タダ」付訓の例が見出せる。(10)

一、古辞書中の「惟」の記載は室町時代になってから現れる。

一、仏典の古訓点資料中に「惟」の例は現在の調査範囲に限ると、平安時代までは見出せていない。

一、漢籍の古訓点資料中に「惟」の例は鎌倉時代に既にその用例を見出せる。

一、江戸時代の和刻本には「惟」の例が資料の内容に関わらず広く見出せる。

一、論語の諸本中、新注依拠の資料において「惟」の例が見出せる。

以上、教行信証諸本間における「惟」字に「タダ」訓が現れるという異同に注目し、その異同の要因は、室町時代以降の漢字と和訓の結びつきの変化を背景としたものではないかということについて述べた。

変化の要因については、一つの可能性として、論語の新注本文の影響について述べたが、未だ不十分の感が拭えない。

今後の課題として、実態の把握と要因の更なる究明や、中世において漢字と和訓の結びつきが変化した例が他に有るか否かといった検討が残されている。

注

(1) 中田祝夫氏『改訂版　古點本の國語學的研究　總論篇』(勉誠社s54・11)(附論)中近世の訓讀の沿革(元号はsが昭和、Hが平成を示す。)

(2) 重見一行氏『教行信証の研究』(法蔵館s56・7)「第一章　教行信証の文献学的研究序説」に坂東本親鸞真筆説に関する流れと著者の論が示されている。それ以下の章においても坂東本が親鸞真筆である証左が示される。

(3) 末木文美士氏『日本仏教史』(新潮社H8・11)その他。

(4) 注(2)参照。

(5) 調査対象の諸本の書誌については、注(2)を参考にした。諸本の書写年次は、以下に略述する。
坂東本(大谷本願寺蔵)(一二六二年以前写)、高田専修寺本(三重県津市一身田町専修寺蔵)(一三〇〇年以前写)、真宗寺本(新潟市西堀通真宗寺蔵)(一四二五年写)、文明本(山口県美祢郡秋芳町明厳寺蔵)(一四七〇年写)、寿福院本(三重県鈴鹿市三日市寿福院蔵)(室町時代写)、高田室町末期本(三重県津市一身田町専修寺蔵)(高田慶長本と同時頃写か)高田慶長本(三重県津市一身田町専修寺蔵)(一六〇〇年写)、西蓮寺本(滋賀県草津市上寺町西蓮寺蔵)(室町時代写　信巻本以下は南北朝時代写、複数の加点有り)
又、調査においては、重見一行氏寄贈広島大学文学部蔵紙焼写真を使用した。

(6) 「唯願」「惟願」に「ヤヤ」訓が付されることは、教行信証における特徴的な訓読ではないかと考えられる。一つには、先の表四にて示した如く、「唯願」「惟願」に「ヤヤ」と付す例が他の平安鎌倉時代の古訓点資料に見出せておらず、どの訓点資料においても確認出来るという一般性があったものではないと考えられるからである。大坪併治氏の論「「唯」訓義考—訓点資料を中心に—」(国語国文s45・5)においても「ヤヤ」訓は指摘されていない。

表　親鸞自筆加点資料における「唯」「惟」字の訓読

資料名	唯 タダ	唯 ヤヤ	惟 タダ	惟 ヤヤ
浄土三経往生文類	○			
浄土高僧和讃				
正像末法和讃				
西方指南抄	○			
見聞集	○			
大般涅槃経要文	○			
信微上人御釈	○			
四十八願文	○			

○は付訓例のあることを示す。

又、親鸞には、自筆の加点資料が教行信証のほかにも存している。それらの資料において「唯願」「惟願」という熟語に「ヤヤ」の訓を付した例が見いだせない（表参照）。教行信証に「唯願」「惟願」が現れる箇所は、大般涅槃経の引用箇所である。親鸞加点の資料中には、大般涅槃経も存するが、その資料中の「惟願」の付訓は、教行信証中の如く「ヤヤ」ではない。以上の点から教行信証の「唯願」「惟願」の訓読はこの資料に限った例である可能性が高い。「ヤヤ」という語自体も、現段階では、訓読語の中にあることを見出しておらず、類例が無い点に問題は残るが、副詞と解釈するほうが、原漢文の「唯」字の用法とも重なるのではないかと考えられる。

(7) 大坪併治氏、注(6)論文。尚、上記論文中で、大慈恩寺三蔵法師伝に「惟」字が「タダ」訓と結びつく例があると述べられる（論文中の用例二十六）。しかし、虫損箇所であり、築島裕氏の訓読文（『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の國語學的研究　譯文篇』（東京大学出版会s40）では、「コレ」と解釈している。

(8) 群書治要中、「惟」字に「タダ」訓の確例がある後漢書の識語を示す。（巻第二十一　後漢書　奥書　郡（ママ）書治要巻第廿一　後漢書一／當巻點事去文永二年四月之／比眺左京兆俊國朝臣畢而同／四年三月廿五日所下遣也且／申出　仙洞御書移點畢但／件本有不安事者引勘本／書直改云々／　越州刺史平（實時花押）（巻二十二、二十三、二十四は略）藤原俊國加点）

(9) 「唯」「惟」字は、中国語や日本語において、古くから、いわゆる異体関係だった可能性が残る。干禄字書（後知不足齋叢書収本）や観智院本類聚名義抄の字体注記の箇所では、口篇と心篇との間で同字として扱われた例は他にないのであるが、異体関係の可能性については検討の余地が残る。

(10) 古辞書の記述が平安鎌倉時代のものと、室町時代以降のものとで異なる例は、それぞれの時代の古辞書が作られるにあたって、参照された資料群の差等を考慮する必要があると思われるが、今後の課題としたい。最後になったが、今回「タ丶」は「タダ」として扱った。実際にどのように発音されていたかについては検討が及んでいない。

使用した資料

古訓点資料（多く、雑誌「訓点語と訓点資料」（訓点語学会編）や「鎌倉時代語研究」（鎌倉時代語研究会編）に載せられた訓読文や影印を使用した。）

『最明寺本往生要集』（築島裕・坂詰力治・後藤剛編　汲古書院H4）・『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究』（築島裕　東京大学出版会s40）『（古典籍索引叢書　第十三巻）醍醐寺蔵本遊仙窟総索引』（築島裕他　汲古書院H7）『（古典研究會叢書　漢籍之部　第九～十五巻）群書治要』（尾崎康他　汲古書院H1-3）『（古典研究會叢書　漢籍之部　第七・八巻）五行大儀』（中村璋八他　汲古書院H1）『和刻本漢詩集成　第三輯』（長澤規矩也編　汲古書院s49）『和刻本類書集成　第二輯』（長澤規矩也編　汲古書院s51）『本朝食鑑』（正宗敦夫　日本古典全集s8）『漢語文典叢書　第一巻』（戸川芳郎他編　汲古書院s56）『随心院聖教類の研究』（随心院聖教類総合調査団編　汲古書院H7）『高山寺古訓點資料第一～三』（高山寺典籍文書総合調査団　東京大学出版会s55-61）『神田本白氏文集の研究』（太田次男他編　勉誠社s57）『猿投影印叢刊第二十六～二十八』（村田正志他編　猿投神社誌刊行会蔵版s41）『三千院蔵古文孝経』（古典保存会編s5）『観智院蔵世俗諺文』（古典保存会編s6）又、江戸時代の論語の版本には、広島大学文学部角筆資料室所蔵の資料や、架蔵本を使用したものがある。

古辞書

『図書寮本類聚名義抄』（勉誠社s44）『五本対照改編節用集（上・下）』（亀井孝他編　勉誠社s49）『古辞書音義集成第六巻　字鏡（世尊寺本）』（古典研究会　汲古書院s55）『龍谷大学善本叢書八字鏡集上・下』（龍谷大学仏教文化研究所編　思文閣出版s63）『天理大学附属天理図書館蔵世俗字類抄影印ならびに研究・索引』（大友信一監修　翰林書房H10）『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引』（中田祝夫他編　勉誠社s57）『古本下学集七種研究並びに総合索引』（中田祝夫他著　風間書房s46）『書言字考節用集研究並びに索引』（中田祝夫他著　風間書房s48）『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』（中田祝夫他著　勉誠社s51）『文明本節用集研究並びに索引』（中田祝夫著　風間書房s45）『明応五年版節用集』（奥村銀松　白帝社s43）『易林本小山版節用集』（杉本つとむ代表　文化書房博文社s46）『早大本節用集』（杉本つとむ編　雄山閣出版株式会社s50）『合類節用集研究並びに索引』（中田祝夫他著　勉誠社s54）『中世古辞書四種研究並びに総合索引』（中田祝夫他著　風間書房s46）『古本節用集六種研究並びに総合索引』（中田祝夫著　風間書房s43）『色葉字類抄研究並びに総合索引　黒川本影印篇・索引篇』（中田祝夫

他編　風間書房s52）『古辞書叢刊　法華経単字』（古辞書叢刊刊行会s48）『類聚名義抄』（正宗敦夫校　風間書房H1）『鎮国守国神社蔵本　三寶類聚名義抄』（解説尾崎知光　勉誠社s61）『字鏡鈔天文本』（中田祝夫他編　勉誠社s57）『字鏡集白河本』（中田祝夫他編　勉誠社s52）『字鏡集寛元本』（中田祝夫他著　勉誠社s53）
親鸞自筆資料
『親鸞聖人真蹟集成』（赤松俊秀他編　法蔵館s49）『高田専修寺本教行信證』（生桑完明他編　法蔵館s50）

（付記）　本稿は、平成十一年度鎌倉時代語研究集会における口頭発表をもとにまとめたものである。席上、並びに、その後も小林芳規先生をはじめ多くの先生方から有益なご意見を賜った。ここに記して深謝申し上げる。又、併せて、稿を成すに当たって終始御指導頂いた室山敏昭先生・松本光隆先生にお礼申し上げる。